

診療所に行ってみると、火傷をおった人たちが、続々と顔にただれた皮をぶら下げて、焼け破れた服をまとい、何んとも表現出来ない姿で詰めかけてくる。なかには上半身裸の人、髪の毛は焼けて丸坊主の人、耳の皮をぶら下げている人、そして殆どの人が裸足であるように見えた。それでもここまで来た人は自力で歩ける人々であった。

医師に傷を見せると「切れて出血はしているが、こんなの怪我(けが)ではないよ」と言われガーゼを少々もらった。寮に帰って指示を待てること。そのまま寮へ引上げて見ると、足の踏み場のないガラスの海。幸い夏で蚊帳を吊ったままだったので、布団と畳は中まで破片に見舞われずにすんだ。

しばらくして、「元気で、広島市

内に親戚縁者のない者は、全員会社に集合、市内に救援に行く」との指令。

時刻は判らないが昼前後であったか。会社に集合してみると「市内には、防空壕の中に相当生存者がいるらしい、会社の要人も西の方の防空壕の中にいる模様なので、蟹屋町の旧疎開跡工場を拠点に負傷者、罹災者を収容し救済すること」との指令。

爆心地(当時は知らなかった)付近から紙屋町、相生橋東側の近くを次々に大八車で救出に当たったが、思うように道は通れない。工場の床には筵(むしろ)を敷き、生存者と思われる人は寝かせた。中にはコンクリートに直接のものも可成いた。

「水」「水」と力の無い声で呼ぶ。火傷者に水を飲ませることは禁物と指示あり。脱脂綿に水を含ませて唇

を拭いたり、水を塗る程度。中には拭いていると綿から指まで噛みつく者もいた。体は身動きしない。「水」がほしいのだ。顔は焼けて目のみが開いている。皮はベラベラにまくれている。次々に拭いているとその内「水」とも言わないのが出てくる。死んだのだ。どうすることも出来ない。

夜になる頃、薄暗い所に、次々と身内を探しに人々がやって来る。「これも違う」「これも違う」と声を落として去って行く。恐らく五十人位収容していたと思うが、一人、二人と声を出さなくなっていく。脱脂綿を唇に当てても動かない。死んでしまった。

その日は、真夜中に、大八車に三人を乗せて寮の方へ帰った。空は真つ暗、冷たいものがほおをうつ、雨